特別研究指定校　活動報告書
（財団ホームページ掲載用）

・写真や図などを適宜挿入してください。
・ボリューム：Ａ４用紙で数ページ

期　間：2021 年 1 月～3 月

学校名：大阪市立新巽中学校

研究課題（申請書通りに記入）

アダプティブ・ラーニングを地盤とした２１世紀スキルと ESD 教育の推進
～全生徒を全教員で見守り、自己実現を可能にするＩＣＴとＡＩの効果的な活用～

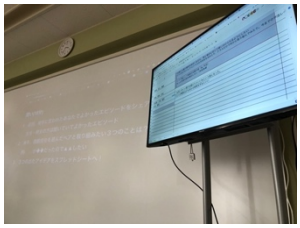
成果目標（できるだけ具体的に記入）

1. 単元テストによって、生徒は学び直しの機会やできないところにより焦点をあてて学習をすることができる。
2. 単元テストによって教師は教科の評価方法を改善する仕組みとなる。
3. 生徒は自らの課題に応じて必要な学習の手立てを考え、選択するようになる。教師も課題を明らかにし、コーチングの視点の向上につながる。
4. PBL 型学習の推進に伴い、生徒はもちろん、教師も探究的なストーリーを描きながら授業をつくる力が深まる。これにより、学校経営においても同様に、課題解決の視点をもった教員集団が形成される。
5. 生徒が望めば自主的に学ぶ仕組み（ICT 機器当の整備・活用等）を整えることで、与えられたことをこなす学習の習慣から、自ら考え、選択し、行動することができる自律した学習者へと変容する。
6. 取り組みによってどんな生徒を育成したいのかを明確にする。また評価の視点をつくり、学校全体で同様の方向性をもって学校運営を推進する。

本期間（1 月～3 月）の取り組み内容

本期間は主に実践と振り返りの時間となった。パフォーマンス課題の実践においては実践事例集に記載したので、ここではそこに至るまでの校内での研修関係について記載する。

【ワークショップ型研修への移行】



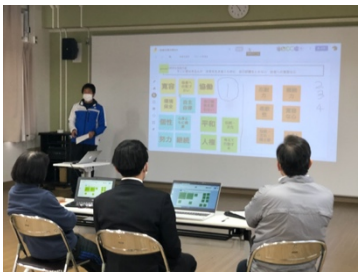
授業改善や学校の仕組み改善に関する研修全般をすべてワークショップ形式に切り替え、グループでディスカッションする仕組みを整えた。これにより、全体で発言するのは気が引けるがグループ内での対話の中なら発言できるといったことが増える傾向となっている。特に本校はこれまでたくさん仕組みを変えて「気づいたら混ざってる」取り組みを推進してきた。しかし、進めていく中で、それらの是非や改善について時間をかけて全体で振り返ることが少なかった。今回のきっかけを機に、下記の３つの視点で振り返りを行った。

１）タテ持ち・複数担任といった働き方について
２）評価（B・S・P）について
３）ICT と教育活動の親和性について

特別研究指定校　活動報告書
（財団ホームページ掲載用）

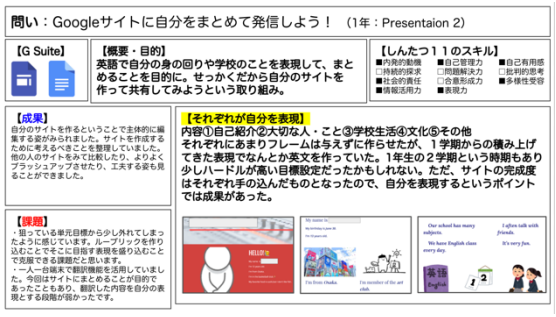
振り返った内容は全て Google スプレッドシートで共同編集し、即座に共有した。今までであれば校内研修担当が書類をまとめフィードバックを返す作業が必要で、労力や時間のかかるものであった。これらの環境面が整ってくることで効果的で効率的な研修も計画することが容易になった。

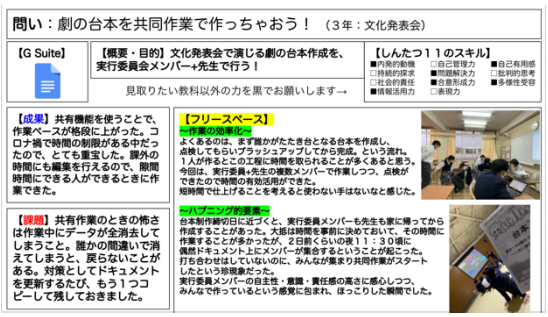
教員間の垣根を崩す仕組みと ICT の融合、そして対話の場が整ってきたことにより、ずいぶんと心理的安全性が担保された環境に改善されたのではと評価している。現在は次年度の学校目標を全教員で整えるワークショップを実践しており、情報の整理は Google Jamboard にて行っている。ここまでの研究で培ってきたものが今後につながっていく手応えも感じることができた。

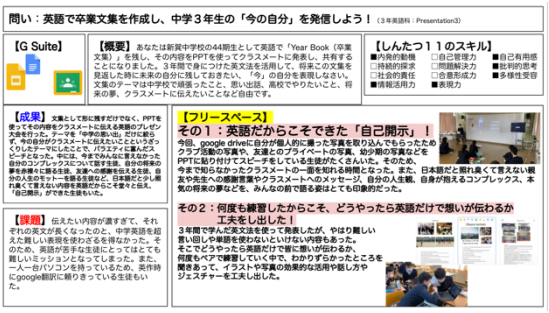


【成果物の作成】

こちらは Google スライドを使い、全体で共同編集し作成を行った。最初のひな形のみ共有し、あとはそれぞれがアレンジして作成するものとした。こちらも共同編集で行うことでどのような成果物（ゴール）を作成すれば良いか、どんなレイアウトにすれば良いかなど、教えることなく全体で方向性を共有することができ、現在、事例を 50 以上まとめている。この１年、教師も生徒もみんなでより良い活用方法について向き合ってきた。活用の場面も実に多様で、「事例はあるが書くのが大変だ」とため息をもらすぐらい活用してきたことを改めて実感することになった。







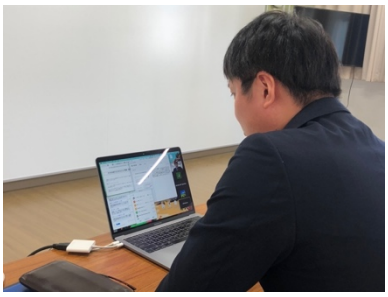
特別研究指定校　活動報告書
（財団ホームページ掲載用）

【PBL での活用場面】

１・２年生は２月に学習発表会を行った。１年生は SDGs、２年生は e-sports とエンターテイメントをテーマに実施した。こちらも学習場面と ICT との相性の良さを高く感じるものとなった。生徒のプレゼンテーション、教師のオンライン配信は定着しつつあり、発表を YouTube の限定配信で届け、保護者や外部の方々とつながりを保ちながら、必要最小限の方々と対面による活動を実施し、安全・安心の学びの場を持続させることができたことは次年度へもつながるものだと実感した。

【研究発表時における活用について】

２月 22 日（月）にオンラインによる研究発表会を実施した。発表、質疑応答、ICT 活用の対話の３部構成で、発表以外は全てブレイクアウトルームにて本校の教員、そして生徒とともに交流した。本校に在籍してから PBL 学習に向き合ってきた２・３年生も一緒に学びについて考える場となり、生徒の社会貢献への心の醸成にもつながった。



※アドバイザーの助言と助言への対応

オンラインにおける研究発表で、対話の場面をつくるようアドバイスをいただいた。参加者も 40 名近くあったので、全員が一律同じテーマで対話できるような問いだてが必要となったが、その助言のおかげで、全教員がこれまでの実践を振り返り、「私たちは何をしたかったのか」を改めて整理することができた。また、その実現の上で校内の研修も伝達型の研修には限界があることにも気づくことができ、リフレクションの推進へ大きなきっかけとなった。

特別研究指定校　活動報告書
（財団ホームページ掲載用）

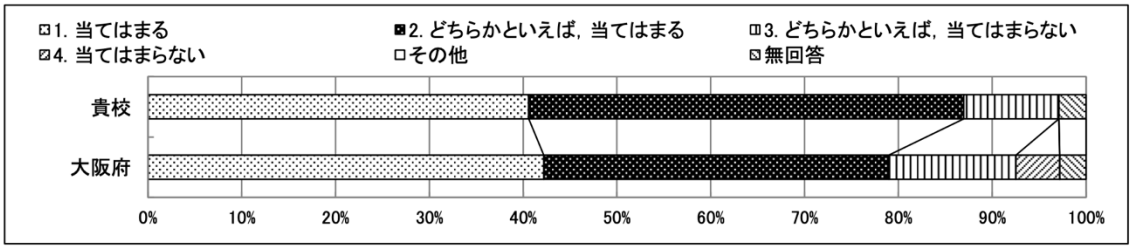
本期間の裏話（うれしかったこと、苦心談など）

特に事例集を作成するにあたり、全教員に１枚以上提出を声かけたが、前述したように「ありすぎて書けない」という悩みが出てきたことである。それだけ学校の教育活動に一人一台環境が整ったことで活用に深まりが出てきており、今やどんなシチュエーションでも活用する姿をみる。本校は決して ICT に先進的な学校であったわけではない。しかし教員が協働し、補い合う仕組みを整え、子どもたちと共に学ぶ。当たり前のことをただ当たり前に積み重ねてきたことで、たった１年でこれだけのことができるのだということを証明できたと思っている。

また、失敗に寛容な集団育成ができたようにも感じている。これは大阪府チャレンジテストの結果で「失敗しても笑われない」の項目が高いことからも見て取れる。つまり、「心理的安全性」が担保された学びの場となっているということである。特に今年１年間、学習の中で全員が模索し、失敗し、そこから学ぶ営みを繰り返してきた本校だからこそ生まれた副産物ではないかと考える。逆に言えば、ICT を真の意味で活用する環境を整えるためには、失敗を受け止める一定の受け皿が必要だろう。そこには少なくとも学校レベルで管理するなど、ある程度学校に権限を譲与しなければ進まない一面も垣間見えたと感じている。「個別最適化された学び」が令和の日本型学校教育において大きく明示されている以上、自治体レベルで一律制限をかけるのではなく、学校単位で自ら考え、どのような力を育むのかから逆算して端末活用の環境を整えていくことが必要ではと考えるようになった。

＜Ｒ２大阪府チャレンジテストの結果より＞

質問番号	質問事項									
問5	授業中，間違っても笑われない。									
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	その他	無回答
貴校	40.6	46.4	10.1	0.0	-	-	-	-	0.0	2.9
大阪府	42.2	36.8	13.5	4.6	-	-	-	-	0.0	2.8

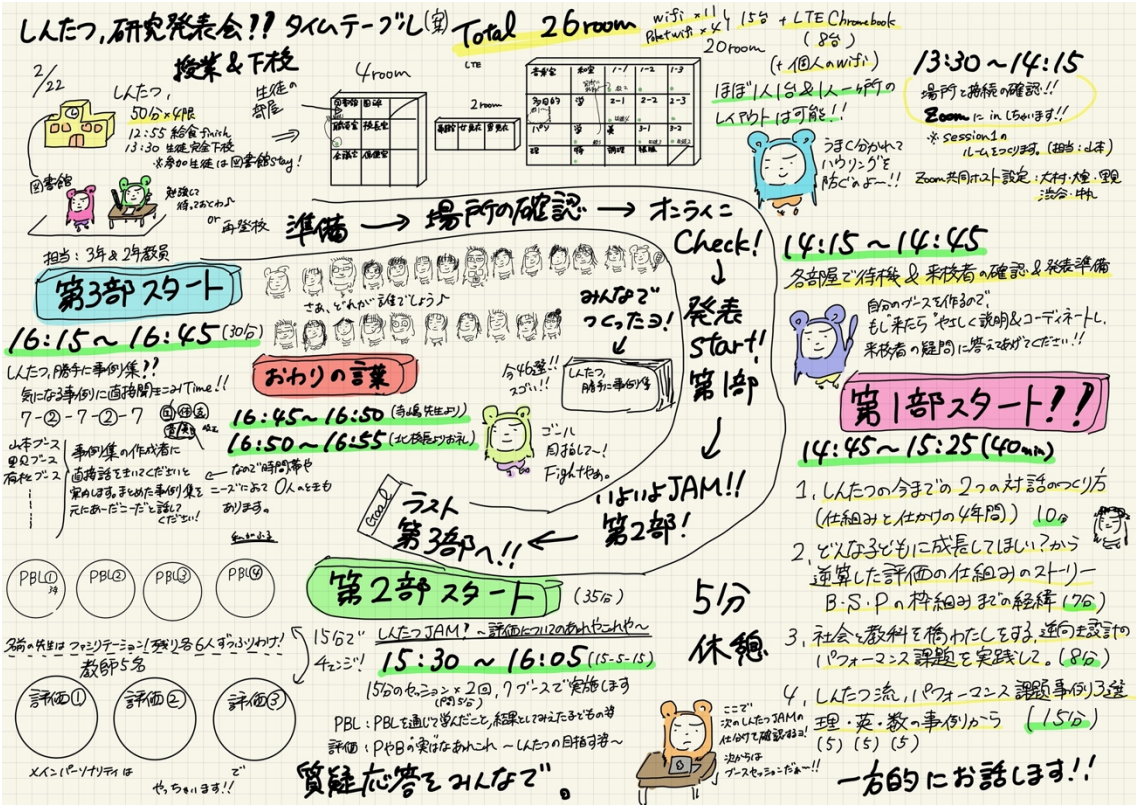


話は少し変わるが、PBL でゲームを題材にして見えた「モノの多様性」についても共有したい。２年生の e-sports 探究については「なぜゲームは悪いものだと思われているのか？」という問いと、「ワクワクドキドキの仕組みって何だろう？」に迫るべく約半年間探究を進めた。そして最後の学習発表では「脱獄ごっこ」という UUUM が提供しているアプリを活用して e-sports 大会を実践し、ゲームとの向き合い方や「なぜゲームは悪いものだと言われるのか？」といったテーマでプレゼンするなど子供たちと一緒にモノとの向き合い方、関わり方について考えることができたのは非常

に価値があったと捉えている。以前のレポートで**「端末は言葉と同じ。奪うものでもなく、正しい使い方へ導くことが大切だ」**と報告を行ったが、これは別に端末に限った話ではない。YouTube も SNS も、そしてゲームも正しい使い方をすることで人生を豊かにすることができるツールである。であれば、言葉と同様に失敗の中から学ぶことも必要な場面が出てくるだろう。端末やゲームと向き合うことで、新しいモノとの関わり方について考えを深めることができた。わからないから避ける、知らないから導入しないのではなく、今までと異なることを前提として受け入れる。そしてまずは使ってみる。間違った使い方や関わり方をしたら問いかけ、正しい方向に導く。改めてテクノロジーを導入する際の重要な心のあり方を考える期間となった。

最後にオンライン発表に至るまでの裏話でこのセクションを終えたい。2 月 22 日に実施したオンライン研究発表会に向けて Zoom の使い方やブレイクアウトルームなど通信環境面も含め最終確認する研修を行った。ハウリングが起こらないような環境、WiFi が届く環境、退出してしまった場合の対処法、デジタル迷子の誘導などを中心に小一時間確認をした。なんてない研修であったが、ふとあることを思い出した。ちょうど一年前、休校期間になって真っ先にやったのが校内での Zoom 研修会だったということを。その時は時間も十分にある中だったにも関わらず、アカウント取得だけで手一杯、つなげた人が何人いたかという状況であった。マイクのオンオフやなぜハウリングが起こるのかなど、今や基本的なことですらアタフタした記憶が蘇る。しかし、今回の発表会では全教員がこれらを使い、研修を無事に終えることができた。これは決して表に出ることのない、本校教職員の「コロナ禍における学びと居場所の保障」に向き合った賜物であるといえるだろう。本校の 1 年間がどのようなものだったか、実感するイベントであった。

特別研究指定校　活動報告書
（財団ホームページ掲載用）



本期間の成果

・２年間の取り組みを再整理し、パフォーマンスで育みたい生徒の姿を共有することができた。

・生徒の姿からどんな力を育んでいくのかを共通認識持つことができた。

・事例集の作成ができた。

・研究発表会に向けた研修が推進できた。

２年間の成果

・生徒の成長に焦点を当てた到達度評価の手法と目的の枠組みが整理できた。

・逆向き設計におけるパフォーマンス評価の推進によって、すべての教科で「どんな力を身につけてほしいか」「社会でどのように発揮してほしいか」について整理することができた。

・ICT 活用とパフォーマンスの相性のよさについて整理することができた。

・情報モラルやリテラシー教育は、いつでもどこでも誰もが正しい使い方について考え、それに近づける営みが必要であることが理解できた。

今後の課題（計画）

・パフォーマンス課題を含めた生徒の表現力の育成。そのための ICT 活用

・教員の WS を充実させる（集団的リーダーシップの醸成を図る）

・さらなる表現方法の獲得のため、ドローン×プログラミングを進めていく

・大阪市の整備した端末による ICT 活用推進

２年間を振り返って　自己評価・感想（気付き・学び）など

この２年間を振り返って、思うことは１つ。**当たり前のことをただ当たり前にするための奮闘**だったということである。本校の取り組みの最上位の目的は、**「すべての子どもに学習権と居場所の保障を」**という従来から大切にされている理念そのものである。そして最上位の目標は**「子どもたちが自身の人生を豊かにし、他者とよりよい社会をつくる」**というとてもシンプルなものである。そしてこれらはもちろん、今までの教育現場が成し遂げ、「今」へつないできたものだということは言うまでもない。

しかしこれらは、様々な要因によって達成が困難な状況にあると感じている。個に適した対応は年々増加し、複雑化している。日本の不登校問題も年々深刻化する一方である。もちろん子どもたちがよりよく生きるための一手となるのであれば、それらを惜しむことはない。だが、この「時間的」・「空間的」な課題は、教員の労働時間にも大きく影響を及してしまう。**「子どもたちにとって個別最適な環境」と、それを実現する「教員の時間や余裕の捻出」**という２つの課題を解決することが求められている。この問題は思ったよりも根が深く、「２つのバランスを保つ視点を探せばいい」といったものではなさそうである。この構造を根本から解決する仕組みを構築し、教育の「大切な営み」を守るには ICT が必要だ、そう考えるようになった。**テクノロジーを基盤とした新たな学びの場を整える**ことが子どもの未来を照らし、教師の働き方を是正する一手になる。そう信じて、ICT の本格活用に向け、応募したことを思い出した。

一人一台環境が整ったからといってスムーズに授業で活用できたわけでもなく、充実させるためには多少の苦労もあった。しかし、その２つの問題を解決するために、学校全体で少しの不安を抱えながらも新たな可能性に向けて動き始めた。研究としてはまだ一歩を踏み出したばかりなので、引き続き子どもたちのこれからをつくる学校として持続可能な取り組みを模索し続けていきたい。

最後に、本校の多面的な取り組みを整理し、教科指導におけるパフォーマンスの視点を与え、ここまで導いてくれた寺嶋浩介准教授には本当に感謝をしている。アドバイスがなければどこに焦点をあてて推進すれば良いかまとまりのないまま進んでいたと感じている。また、このような機会を与えてくれたパナソニック教育財団の皆様にも感謝の意を申し上げ、結びとしたい。